

「ネガティブ・ケイパビリティ」 精神科医師 生嶋 孝太郎



がん患者さんとその御家族は、がんによる身体的な痛みだけでなく全人的な苦痛を抱えており、心理的・社会的なサポートは必要不可欠です。一方で、その患者さん達を支援する私たち医療者のメンタルヘルスケアも重要です。

緩和ケアでは終末期で死に直面することが多く、苦痛も難治であったり、答えのない問いを投げかけられたり、対応を迫られ、時には患者さん達から不安や怒りをぶつけられることもあります。そんな時、答えを出せない私たちの心にも苦痛が重くのしかかってきます。そこで大切になってくるのは、「ネガティブ・ケイパビリティ」という力です。「ネガティブ・ケイパビリティ」とは、「答えの出ない事態に耐える能力」あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」をさします。この言葉は、18世紀に英国の詩人キーツがシェイクスピアに備わっている力として発見し使われ、それを精神科医ビオンが再発見し精神分析家に必要な能力として提唱しました。日本では小説家としても有名な精神科医の帚木蓬生が国内に広く紹介していますが、この力は精神医療・緩和ケアにとどまらず全ての医療現場で必要な力であり、私たち医療者を支えてくれる力だと思えます。

「ネガティブ・ケイパビリティ」の実践は、困難な事態を前に何もしない・放置することとは違います。そこに不思議だと思ふ気持ちを忘れずに留まりつづけることでより深い理解に繋がり、患者さんやその御家族に「共感する」ことができ、患者さん達が苦痛を抱えていける助けになり、さらに自分自身も救うことに繋がると思えます。どのように「ネガティブ・ケイパビリティ」を育てていくかというのは、とても難しいのですが、私は答えの出ない困難な事態に陥った時に、この言葉を思い出すようにしています。まずは「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉・この存在を知っておくことだけでも、困難な事態に居続ける力になってくれて、少し心が楽になると思えます。

ホスピス緩和ケア週間

イベント開催しました



2023年10月13日に1階外来ロビーでホスピス緩和ケア週間のイベントを開催しました。緩和ケアに関するミニレクチャーやポスターによる啓発活動を行いました。また、ボランティアの方にもご協力いただき、フルートやピアノによるミニコンサートを行い、素敵な演奏を披露していただきました。院内ロビーに優しい音色が響き渡り、患者さん・ご家族と音楽を通して暖かな癒しの時間を共有することが出来ました。